

週刊 NEWSLETTER

「第3回からだのふしぎ探検」大盛況

ワクワク感最大限にかきたて

小中学生にヒトの体の仕組みや医療の仕事
を体験してもらう「第3回からだのふしぎ探
検 in 熊本保健科学大学」が20日（土）開催
されました。好天に恵まれ、キャンパスは夏
休み初日を迎えた親子連れで大賑わい。昨年
を大きく上回る273人が訪れました。

1号館の2会場とキャンパステラスの
計3会場に各学科が計19のブースを開設
しました。1号館の医学検査エリアでは、
顕微鏡を使った細胞の観察、採血の疑似
体験、飲み物のpH検査など、どのブース
も盛況。学生たちの手ほどきを受けなが
ら子どもたちは目を輝かせて挑戦してい
ました。

小中学生、
楽しみながら理解深める

また、リハビリテーションエリアでも、
各種遊具や自助具を使ったゲーム形式の
体験プログラムや各種測定など、各専攻
が工夫を凝らしたブースが目白押し。あ
ちこちで歓声が上がっていました。

一方、キャンパステラス（解剖、看
護・助産、アカデミックスキル支援セン
ターエリア）では、骨格模型や臓器模型
に触れながら人体を学んだり、妊娠・出
産をテーマに胎児の成長をたどるブース
も。

「からだのふしぎワクワク劇場」と銘
打った一角では、アカデミックスキル支
援センターの学生指導員と1年生の計10
グループが、体の仕組みなどを題材にし
たオリジナルの寸劇を次々に上演し、子
どもたちを沸かせていました。

(NL編集部)

「赤ちゃんって重いんだ」。好奇心たっ
ぱりに幼児モデルを抱っこ



気分は大谷選手？ バットを振
る力を測る



寸劇が次々と上演された「ワクワク劇
場」。学生たちの熱演で、会場は大盛
り上がり



血液の中のヒーローはどこかな？ 顕微
鏡で探す小中学生たち

楽しく学び 合同発表会で成果披露

基礎セミナー



合同発表会で、楽しかった活動の成果を披露する学生たち

1年次教養科目「基礎セミナー」の合同発表会が17日（水）に開催され、33セミナー計394人の受講学生が活動の成果を披露しました。

「基礎セミナー」は、学科の異なる学生たちがともに学ぶことで交流を深め、チーム医療に求められる「連携協働する力」、「広い視野で考える力」などを身につけることを目的とした初年次教育の目玉授業のひとつです。各講座のテーマは担当教員の専門分野、趣味、興味・関心を反映した多彩な内容で、学生たちが興味のあるセミナーを選びます。

この日の合同発表会は3会場に分かれて行われました。1300L講義室では11セミナーの発表があり、学生たちがスライドや成果物を提示して、ユニークな授業内容を紹介しまし

た。このうち、「色の不思議」（担当：松尾朗講師）では、色の役割や目的をテーマにアミュプラザ熊本（熊本市西区）でフィールドワークを実施。「いいねを発見する研究（写真調査法の体験）」（井崎基博教授）では、熊本保健科学大の魅力を探すため、受講生が学内の思い思いの場所を写真撮影、撮影が集中した個所などを分析していました。また、「おはなし会をつくってみよう！」（山口類准教授）と銘打った講座では、読み聞かせの意義や効用を説いた後、受講生全員がお薦めの絵本を紹介していました。

質疑応答ではユニークな質問も飛び出し、会場の笑いを誘っていました。
（入試・広報課）

友情確かめ帰国の途に 大邱保健大の交換研修生

韓国・大邱保健大学からの交換研修生8人が2週間の研修期間を終え、14日（日）に無事帰国しました。12日（金）に開催されたさよならパーティーでは全員がプレゼン発表に立ち、各学科の講義や病院見学、クラブ活動、韓国と日本の違いなど、日本語を交えながら2週間の研修を振り返りました。

パーティー後も歓談は続き、会場のあちこちで別れを惜しむ学生たちの姿が見られました。パーティーに参加した渡辺雄一学部長は、「発表は皆さん見事な日本語で、大変感心しました。かなり練習したのではないのでしょうか。本学学生との交流が今後も続いていくことを願っています」と話していました。

本学からは8月14～24日、10人の学生が交換研修生として大邱保健大学を訪問します。（入試・広報課）

2週間の研修の成果を発表する
大邱保健大の交換研修生たち



自由な発想育んで

1号館に設けられたオープンスペースにCommunication Boardと書かれた壁面があるのはご存じですか。壁のポケットにマジックが用意され、教員、学生を問わず自由に書き込みができるようになっています。図式を書きながら頭を整理するもよし、友達と議論するもよし…。一度使ってみませんか。（NL編集部）

今週の1枚



「できた！」経験通じ学生の自己効力感高める

精神障害領域の実習では、精神障害者との接触経験の乏しさから、学生の対人面での問題が露呈することが多いことが指摘されています。

そこで、私たちは、適応的な実習を可能にする予測因として自己効力感に着目し、精神障害領域の臨床実習で必要となる態度・技能の習得および実習に対する自己効力感を高めるシミュレーション教育の開発を進めています。シミュレーション教育とは、実際の臨床場面を擬似的に再現して、その環境下で学習者が実際に経験することを通じて学ぶ形式の教育を意味します。シミュレーション教育

により、知識や技術の習得だけでなく、自ら思考を深めるなど主体的学習態度を高めるといわれています。しかし、医療専門職教育全般において、精神障害領域に関するシミュレーション教育は遅れている現状があります。

作業療法学生対象の精神障害領域実習自己効力感育成のためのシミュレーション教育開発により、実習で必要となる知識や技術の習得だけでなく、模擬的な場面での「できた！」という経験から学生の実習に対する自己効力感が高まり、実習時の適応感が増す可能性があると考えています。

基礎研究 (C)
2022-24年



リハビリテーション学科
生活機能療法学専攻
吉村友希 講師

健康・スポーツ
教育研究センター

レポート

B2ヴォルターズ、大牟田高駅伝部がラボテスト

バスケットボール男子Bリーグ2部 (B2) の熊本ヴォルターズと大牟田高校男子駅伝部 (福岡県) が18日 (木)、相次いでアリーナを訪れ、各種ラボテストに臨みました。

熊本ヴォルターズは昨季、B2西地区3位となりB1昇格プレーオフに進出しましたが、越谷に連敗しB1昇格を果たせませんでした。10月に開幕する新シーズンに向け、この日は本村亮輔選手、山本翔太選手ら4選手が下肢筋力や敏捷性、無酸素パワーなど4項目のテストを受け、本学の教職員5人と大学院生3人が測定を担当しました。

一方、北部九州インターハイを間近に控えた大牟田高校男子駅伝部は、部員30人が約3カ月ぶりに来学しました。株式会社明治の管理栄養士大前恵氏から水分補給についてのセミナーを受講。ラボテストでは、部員9人が下肢筋力や持久力、柔軟性など7項目のテストを受け、残りの部員たちは体組成と骨密度を測定しました。テストを受けた部員たちからは「(前回に比べ) 骨密度が上がっている」などの声も聞かれ、自身の体に意識が向いていることがうかがえました。テストは教職員2人と大学院生3人が担当しました。

(入試・広報課)



写真上は、下肢筋力を測定するヴォルターズの選手たち。同下は、ジャンプ動作をチエックする大牟田高駅伝部の生徒

銀杏アラカルト

■九州学院高校の22人が来学 九州学院高校の生徒22人が23日 (火)、本学を訪れ、学内施設を見学しました。一行は入試・広報課職員から本学の概要や医療職についての説明を受けた後、アリーナや図書館など、学内の各施設を見学。その後、同校卒業生で本学大学院臨床検査領域の中村将己さんから大学生活に関する体験談などを聞きました。また、本学のレストランも利用。生徒たちは「メニューが豊富で美味しかったです」と話していました。(入試・広報課)



アリーナで最新の測定機器の説明を受ける九州学院高の生徒たち

中学生の意見を引き出す学生たち



ロールプレイを通してタバコの断り方を学ぶ中学生

中学校で薬物乱用防止教室

看護学科4年次生

看護学科4年生21人が12日（金）、熊本市北区の北部中学校で薬物乱用防止教室を実施しました。学年ごとに「喫煙」「飲酒」「薬物」の健康への影響や、誘われた時の対処方法を、説明や実演を通してわかりやすく伝えました。

講師役の一人、守田玲さんは「友人との関係を大切に思春期・青年期にある中学生だからこそ、『タバコを吸わない』『友人をタバコに誘わない』という意識を一人ひとりが持つことが大切」と語っていました。

「喫煙」の講話を受けた中学1年生は、「タバコを吸うか吸わないかで、顔などの見た目や印象、体の中も変わる。将来健康で生き生きとした姿でいたいので、私は絶対に吸いたくないと思った。大切な人にこそ健康でいてほしいので、今日の講話で習った断り方や止め方を生かしていきたい」と感想を述べていました。また、中学校の先生方も「大学生による授業のおかげで、生徒たちがいつもより熱心に話を聞いているように感じた」と話していました。（看護学科 荒木善光）

高齢者対象に摂食嚥下16項目をチェック

言語聴覚学専攻・松原准教授ら

松原慶吾准教授（リハビリテーション学科言語聴覚学専攻兼健康・スポーツ教育研究センター）の研究グループが23日（火）、キャンパステラスで高齢者への食べること・飲み込むこと（摂食嚥下）に関する健康チェックを行いました。

対象となったのはJA熊本市助け合いの会の10人。本学の教員をはじめ、病院などに勤務する言語聴覚士や学生などを含め24人が、摂食嚥下に関係する筋肉や身体の筋肉の量や力、歯、フレイル、心理面の状態、聴力など16項目をチェックしました。参加した高齢者は、リラックスした雰囲気ですべてを回っていました。

担当した松原准教授は「参加者のみなさんは、研究に参加して非常に満足していました。この活動がより多くの方々に広がることを目標に、今後も継続して取り組んでいきたいです」と話していました。（入試・広報課）



参加者の舌と唇の運動の速さを計測する松原准教授（右）